
夜街幻想

古無我月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜街幻想

【Nコード】

N1498F

【作者名】

古無我月

【あらすじ】

夜の街で舞台町で働くナンバー1キャバ嬢静香。彼女は最近気になっっていることがある。それは同じ舞台町にある施設とそこに働く男性のこと。出会いは最悪の二人に果たして何か芽生えることはあるのだろうか。謎の紳士風にお送りする少し大人向け(?)のエンターテイメント。(…うそかもしれない)

ブログ（前書き）

一応18禁表現等ございませんが、主人公の立場が風俗嬢なので、15歳未満の閲覧はお控えください。

ちなみに風俗嬢を賛美しているつもりもございません。落とす気積りもございませんが。

フィクションとしてご覧ください。

プロローグ

夜に咲く華まちがある。

都心の横に隣接し、潔癖な昼の顔はずした人間の欲望が花咲く町。ここは夜の街と呼ばれし、舞台町ぶたいまち。

その町にはたくさんの人がその人生とともに訪れる。

たくさんネオンに飾られた街路、その下に集う蝶のような、華のような艶やかな女達。

それに誘われるように集まる男達。

その名の通り街はまるで、男も女もまるで劇の登場人物のように踊り、情熱をあげ、憎悪を繰り広げる喜悲劇の舞台だ。

たくさん華と欲望と金とを内包し、夜に昇華させる町。

駅から真っ先に見える場所にある場所に建つビル軍。

ネオンの電飾が華々しく最も目立つ場所ひしめくように数あまたある商店。たくさんあるからと言って何も考えずに入るのはよしなうがよい。

派手な外観に騙され、店頭に立つ若い女性に誘われて地下にでも入れば、何が待ち受けるかわからない。

多く支払いを求められるならまだいい。場合によっては翌日身包み剥がされ、翌日冷たくなる可能性もはらむ。決して店の仕来りに逆らってはいけない。

そんな危険を払っても、いや払っているからこそ、この町は人々を魅了してやまないのだろう。

さて、私はこれからこの町に花開いた一輪の華の話をしようと思う。私が誰かって？

そんなことはどうでもいい。

ただ、私が話すことに貴方が興味を持つか否か。ただそれだけの話だ。

聞きたくないならいつでも引き取ってもらっていい。

だが、少しでも聞きたいと思うのならば、どつぞつゆるりと聞いていかれるといい。
始まりはこの舞台町の一角から始まる。

プロローグ（後書き）

謎の紳士風に仕上げてみた。
誰だよとか突っ込みはなしで。
まるでロマン小説のようだが、
そつでもないような。
とりあえず足掻きます。

第一話 夜の街1

さて、始まりはこの町にある一つのキャバレークラブ「リヴァイアサン」になる。

そこは舞台町において高級なほうに名を連ねるキャバクラだ。

キャバクラとは皆さんある程度ご存知だろうが、厳密にこういった場所かと言えば、わかるだろうか？

一般的にキャバクラとはキャバ嬢と呼ばれる女性スタッフが客に接待する飲食店のことだ。基本的に時間制で金を取り、客は女性スタッフとの会話を楽しむ。キャバレーのような明朗な時間制料金で、クラブの高級感を合わせ持つことを意図している。

だがこれは広義の意味でのキャバクラの定義に過ぎない。

キャバクラにもランクがあり、もちろんそこにいるキャバ嬢にもランクがある。

【リヴァイアサン】は知的な女性との会話を楽しむことを意図する高級キャバクラだ。

キャバ嬢は皆一流大学以上の学力を有すると認められたものしか入れない。客にもそれに準じた知性を要求し、会員制で誰かの紹介が無ければ来ることができない。

キャバクラといえば、どちらかと言うとやはり、風俗の意味にとるから卑猥なことをお考えの人もいるかと思うが、この店はただ単に女性と会話を楽しみたい紳士のための場所を提供しているというのがコンセプトになっている。だから、たとえ運よくこの店を紹介されても紳士にあるまじき行為に走ろうとはしてはいけない。

でないと、すぐに屈強な黒い服の男が来て、追い出してしまうことだろう。その際に何をされても文句を行ってはいけない。それが夜の街の掟だ。破ったものはなにをされても文句は言えない。それこそ、どんなことでもね。

だが、そう言う行為に走りさえしなければ決して【リヴァイアサン】

は悪い店ではない。料金は気持ち高いが、駅に近いほうの立地と出す料理と女性の価値に見合うだけの料金で決して高く取る意図はない。

そうそう、なかなかいい酒の置いてある店だ。店主の趣味がいいせいか調度品も店の雰囲気も女の子の趣味も皆落ち着いていて、居心地がよい。なかなか極上の気分が味わえる店だ。いける機会があれば是非お勧めする。

さて、そろそろ本題に移ろうか。

私がこれから話をしようとしているのは、この店にいる、一人の女性の話だ。

その娘は名前を進藤^{しんどう} 静香という。

おっとこれは源氏名だからね。本名は…。

彼女に直接聞いてくれ。夜の街では本名では呼ばない仕来りだからね。

さて、簡単にこの女性のことでも紹介しようか。髪は赤みを帯びた茶色に染めたものを綺麗に巻いて肩から前に流している。顔立ちは年齢から考えると少し大人びて見える。美人と言える顔立ちだが、飛び切りとはいえない顔立ちだけど妙な愛嬌があつて、誰もが彼女を振り返る魅力を持っている。

それもそのはず。彼女はこの【リヴァイアサン】でナンバーワンの座をここ数ヶ月キープしているキャバ嬢だ。

巧みな話術と相手を立てる絶妙な引き、明るく屈託の無い笑顔。決して人に警戒されない程度の美貌。同僚のキャバ嬢の間でも面倒見が良いと大変人気が高い。店長も気に入っている。まさに非の打ち所の無い女性だ。

一度こんな女性を同伴させてみたいものだがね。残念ながら【リヴァイアサン】には普通キャバクラにあるような同伴制度はない。店長の意向か女性スタッフにあまり負担をかけるような制度を作らないと言うことだ。残念なことだ。

だが、それでも客は引きをきらず集まる。

このキャバクラの魅力を存分に見せ付けられているような気にならないだろうか。

さて、また脱線しかけたね。失敬。

さて、ここで少し静香嬢、彼女の魅力を知ってもらうためにも、客との会話を少し盗み聞かせてもらうことにしよう。

…どうやるのかって？その質問には答えられないよ。

だが、聞く気があるなら少し黙って耳を澄ませてごらん。

ほおら、聞こえてきただろう？

第一話 夜の街1（後書き）

まだプロローグっぽい。
ありや。

その日、彼は初めて先輩に連れられてキャバクラに来ていた。

就職と同時に地方から都心に出てきた彼はまだ都会の華やかさになれない。

まだ新人の彼は予想以上に高級な雰囲気^{ニテ}に飲まれて、硬くなっていた。

きらびやかな内装、花のある女性達。完全に気後れしてしまっていた。

女性達と楽しそうに笑いあう先輩達を横に固まっただま、ウイスキー^ーをちびちびとやっている。本当に華やかな雰囲気^{ニテ}に目がちかちかしそうだと思っていたときだった。

その彼の横に突然ふわりといい香りが振ってきた。

「本日は初めてですか？お客様。」

軽やかな鈴の音のような声が聞こえたかと思うと、女性がふんわりと彼の横に座る。

まるでずっとそこにいたような違和感の無さで座られ、彼は驚いた。彼は彼女の顔をまじまじと見た。決して派手とはいえない顔立ちだが、どこかはつとするような美しさを秘めた女性に思わず、彼は顔を赤くした。ふふつと優しく女性が微笑む。

「あれ、静香？相変わらずいつの間^{ニテ}にいたの？」

「あら、やだわ。相沢さん。ついさつきですのに。そんなに存在感薄いですか？」

「そんなわけ無いじゃないか。でも静香はこの店の中のどこにいても違和感ないからな。妖精^{フェアリー}みたいだと時々感じるよ。美しい妖精女王^{ニテ}？」

「ふふふ。嫌だわ。相沢さんたら。…それより、こちらの方を紹介してはいただけないのかしら？」

そう言われて、ときりとする彼に先輩である相沢はどこかすねたよ

うな顔を作った。

「ええ、なんでわざわざ恋敵になりそうなやつ紹介しないといけな
いわけ？」

本気か冗談かわかりかねる声音だ。静香は困ったように笑った。

「まあ、私はいつでもどなたを紹介されても相沢さん一筋なのに。」

「それは流石に嘘くさいな。静香。」

「ばれました？でも相沢さんが好きなのは本当ですよ。」

そう言つて不思議な魅力のある笑顔を向けられると悪い気はしない
のだろう。

先輩が肩を竦めて、ちろりとロツクを舐めた。

「まあ、いつか。静香だしな。こいつは、…。」

そう言つて相沢が彼を簡単に紹介した。彼はただ、静香の魅力に圧
倒されて何も言えずにそつと頭を下げたにとどまった。だが、そん
な態度でもまったく静香は気にしていないように微笑んでくれる。

その笑顔に陶醉していると、今度は先輩から彼女を紹介された。

「で、だ。この娘は静香。進藤静香だ。」

「進藤静香です。静香と気軽に呼んでくださいね。」

そう言つて静香はそつと名詞を差し出す。淡いブルーの花模様の描
かれた中に薄い色で名前が書かれている。それを固まった腕で何と
か受け取る。

「今後ともよろしく願いますね。」

そう言いながら少しはにかむ様に静香が微笑み、彼は余計に固まっ
た。

決して華やか過ぎる顔立ちではないが、はつとするような色気と笑
顔が人気のキャバ嬢だった。今日の服装は白のラインが綺麗な薄い
ブルーのドレス。誰もが彼女の仕草に話術に一度は恋すると言わし
めたほどのナンバーワン。その日彼女がついたテーブルはいつも以
上にお酒の減りが早くなるともっぱらの噂であると後に先輩から聞
くことになった。

「じゃ、自己紹介も互いにすんだし、さっきの続きなんだが…。」

そう言つてまた先輩が話し始める。笑いさざめくテーブル。よく場の雰囲気を変え人間がいるとは聞くが、静香がくる先ほどのテーブルより話の盛り上がりが遙かによく、明るくなることを新人の彼ははじめて知った。

思わず、静香の行動をつぶさに見てしまう。彼女は客の手にある口ツクのグラスが残り少ないのを見て、静香はすぐにお代わりを用意する。

それをさりげなく交換して、その隣の客が煙草を取り出そうとする気配がすればすぐに、ライターを用意する。完璧な気遣いと、心配り。

まだ二十歳をいくらか過ぎたばかりの女性とは思えない接客術だ。

先輩が上司の悪口を言えば、相槌を打ち、客同士で盛り上がっていれば、あえて口を挟まない。皆が会話を楽しんでいる。その場の雰囲気を作るのが彼女の役目で、それを完璧にこなしている。

「それで、もう、そのときの社長の言い分ときたら……」

相沢が、そう愚痴ろうとしたとき、静香のテーブルの横で突然その騒ぎが起こった。

「きゃあ！」

がっちゃん！

そのとき突然何かが倒れる音が聞こえた。すぐ隣の席で客らしき男がソファに肩肘をつきまるで突き飛ばされたような格好をして、そのズボンにはおそらく倒れた拍子についたであろう酒のしみが見て取れた。

皆が呆然と音のほうを見る中、静香は素早く、そのテーブルにいたのはまだ入店して一週間たっていない新人の子だと確認した。その間におそらく突き飛ばされたのだらうショックから立ち直った男がソファの上から立ち上がり、激怒した様子で怒鳴った。

「どうなっているんだ！この店は！支配人を呼べ！」

怒鳴り散らす男にびっくりしていると、隣の静香が動いた。それに気付いたこちらに素早く小声で「すみません」と非礼を詫びる。呆

然とするこちらを残して彼女は、騒ぎの起こったテーブルに近づいた。

「お客様。何か、この娘が粗相を？」

静香が近づくと、女の子が胸の部分を両手で押さえて、涙ぐんでいるのが見えた。男は一瞬こちらに来た静香に見惚れたが、次の瞬間に声を掛けたのがキャバ嬢だとわかって怒鳴った。

「なんだよ！貴様！俺は支配人を呼んでいるんだ！お前みたいなキャバ嬢じゃねえ！」

静香に向けた、あまりの無知蒙昧な台詞に他の客やキャバ嬢が眉をひそめた。

だが、静香は慌てず、まるで子供に言い聞かせるみたいに言った。

「私はこの【リヴァイアサン】のナンバー１の静香です。ここでは女の子の統括をしているのは私です。この娘が何かいたしましたか？」

あまりに毅然とした態度に思わず、酔っ払っていた男もたじろぐ。

「…その女が、何もしてないのにいきなり俺を突き飛ばしたんだよ。だから俺はグラスを倒して、服に酒がかかってだな…」

「うそ！この男が私の胸に手を…！」

少し涙目で反論しようとした女の子を目線だけで黙らせた。接待する側が、客を非難するのはあまり見目のいいことではないからだ。

だが、彼女の言葉で大体の事情を察した静香はしずかに酔っ払った男に向き直った。

「…お客様。この娘がお客様にしたことの非礼は詫びます。ですが、ここは紳士の集まる社交場です。お客様は少しこの場所を勘違いなさっていませんか？」

「…なんだと？」

静香の言葉に客の顔に酒のせいだけでない朱が上る。だが静香はあくまで悠然と微笑んだ。

「ここは会話を楽しむ場所です。他のことがお望みでしたら、別の場所にお願いします。」

一瞬静香の笑みに見惚れたようになった男だったが、暗に出て行け
といている言葉だと理解して、いきりたった。

「…っ！たかだかキャバ嬢の癖にお高く留まってんじゃねえ！」
大分酔っている様子の男が濁った目で睨むが、静香はまったく引か
なかった。

「あら、それなら貴方はそんなキャバ嬢に追っ払われているそれ以
下の存在なのですね。」

「あんだと！こら！」

男が静香に触れようと手を伸ばすが、直前に静香がぱしりと手を払
いのけた。

それから、醜いものでも見るように眉間に皺を寄せた。その表情が
いつもの明るい彼女のものとはかけ離れ、まるで気高い女王のよう
な威圧が見えて男が思わずたじろいた。

「触れないで欲しいわね。汚らわしい。…さあ、お客様がお帰りだ
わ。」

静香が手を叩くと、二人の屈強な男が客の両脇を掴み上げ、店から
引きずり出す。

客は必死で抵抗しようとするが、ただでさえ力の強そうな男二人に
つかまれ、逃げることも出来ず連れ出される。

「くそっ！キャバ嬢ごときが！覚えていろよ！」

「…ええ、覚えておいてあげましょう。汚らわしいキャバ嬢以下お
客様。」

静香の言葉に顔を真っ赤にしたまま、客の姿が、扉の外に消える。

それを完全に確認してから、静香は静まり返った室内に向かって手
を打った。

一斉に扉に注目していた店中の視線が静香に集まる。

「さて、皆様。楽しくお酒をお楽しみの中、無粋な騒ぎを起しまし
て申し訳ございませんでしたわ。」

そう言って静香が深々と頭を下げると、店の従業員がそれに習って
頭を下げる。

「…静香が謝ることじゃないだろう？あの男が悪いんだから。」

客の一人がそう言うと、そくだそくだ、と次々と賛同の声が上がる。その声が静まるのを待ってから静香は再び口を開いた。

「いえ、この店のナンバー1として騒ぎを小規模に抑え切れなかったのは私の落ち度です。…ですが、庇ってくださった皆様のお気持ちは大変嬉しかったです。ありがとうございます。」

そう言って、最初に庇ってくれた男性客に笑顔を向ける。それは決して明るすぎるものではなく、恐縮している雰囲気の中に恥じらいのようなものを感じさせる表情で、思わず男性客が赤くなる。周りの嫉妬交じりの羨望が男性客に飛んだ。

「お詫びと言ってはなんですが、今日は各テーブルに一本ずつボトルを私からサービスをさせていただきます。」

「え？マジ？」

若い客が思わずといった感じで、驚きの声を上げる。

通常より高い店なのでボトルを入れるのに十万円以上はざらだ。ボトルを入れるのは若い時分は難しいのだ。

静香はそういった男性の懐具合も見た上で、その客にも決していやみでない笑みを浮かべながら話しかけた。

「ええ、お客様。不快な思いをさせたお詫びとしてはお酒で代用とは少しおかしいですけど。許していただけますか？」

「ええ！？そんな！もともと不快な思いなんて…。」

しどろもどろになった男性客は静香の笑顔で顔を赤くして俯いてしまふ。

「…それは安心しました。」

そう笑顔のまま、心底安心したような顔をした静香は店の奥で店主がかすかに指を動かしたのを目端で捕らえて視線だけで頷き返した。静香はホールに向き直って

「では皆様。ごゆるりと再び楽しい時間をお過ごしください。」

頭を深々と下げた後、さりげない様子でまるで舞台を引っ込む主演女優のような足取りで奥へと歩き始める。

そんな静香を見て、誰も不自然に思っ
て声を掛けたりしない。
ホールには騒ぎが起こる前のざわめき
だけが戻り、静香はその舞台上から
裏へ戻った。

2 (後書き)

キャバクラの雰囲気ってわかりません。
突込みがあつたらどうぞ。
修正しますわ。

「お疲れ様あ。 静香。」

表舞台であるホールから引つ込むと、少し薄暗いスタッフリームに支配人の片桐が立っていた。タキシードに口ひげを生やしたダンディな三十絡みの男性なのだが、なぜか女言葉で少し仕草もなよよしている。撫で付けた髪の下の黒い少し垂れ目気味の瞳は優しく、一見少し頼りなさそうに見えるが、本当に頼りない男がこの夜の街の激戦区である舞台町で何年も店を任せられるほど世の中は甘い。

その証拠にリヴァイアサンは片桐が支配人になってからそれ以前の売り上げの三倍を記録しており、以前の二倍の広さに改装にも成功している。

静香は片桐を確認するとホールに通じる扉を閉める。途端、喧騒が遠くなる。

二人きりの空間になった瞬間、静香はそれまでの余裕に満ちた万能キャバ嬢の顔を変化させ、不機嫌丸出しの二十歳の女性顔になった。

「…支配人。なんなんですか？あの客は？あんなのが紛れ込むなんて。会員制の売りはどうしたんですか！ぐわっ！あんなのせいで私の給料が！」

口調も態度も変えて地団太を踏む静香に、まあまあと片桐がなだめる。

「ほんと。まいっちゃいわねえ。ま、貴女の給料だったら、全員のボトルでも今日一日働いたら十分稼げるでしょう？ちゃんと給料から引いておくから払いは気にしなくてもいいわよ。」

意地悪く笑う片桐にぶすつとした表情を向ける。客にはとても見せられない顔だ。

「稼げますけどね。今日の分はただ働きじゃないですか！」

「だったら、おごるなんていわなきゃいいのに。」

呆れた表情を見せる片桐に、眦を上げて反論する。

「それはそれです。お客さんに不快な目にあつたと外で言いふらされたら信用を売りしにしている店としても打撃じゃないですか。私はここ以外で働く気は無いんですから、つぶれてもらつと困るんですよ。」

静香は十八歳になってからこのリヴァイアサンで働き始めて、二年それなりに仕事に誇りを持っていた。世間には眉をひそめられる仕事だが、人と話すのはむしろ好きでお酒を交えても会話の主導を握つて、相手を楽しませられたらそれはそれで快感を覚える。逆に相手の機嫌も損ねやすい仕事であるため、スリルがあつて面白いとも思うし彼女にとってはなかなか挑戦し甲斐のある仕事であつた。

それに時間の融通が利くし、なにより時間単価の高い仕事は一人暮らしである彼女には大変都合が良い仕事だ。なくなつてもらつても困るし、なによりこの場所が自分の居場所だと思っている。

そんな静香のプロ意識を知っていた片桐も流石に今日の客はまずかつたと思っているのか素直に謝つてきた。

「…それはほんと、ごめんね！。今後は出入り禁止のブラックリストに載せておくからあん。」

素直に謝るのは片桐の良いところだ。下手に言い訳もしないし、大分自分より年下である静香の言うことも邪険せずに聞いてくれる。

「ほんとですよ？それにあれを紹介した奴もついでにお願いしますよ。本当に友達見る目ない輩もここの客としてだめだめですよ。」

「…いや、流石にそれは…。」

片桐が静香の言葉に渋面を作つた。そのあまり普段にない決断の悪さにそつと眉をひそめた。

「容赦しちゃ舐められますよ？」

「それが、菅沼だつて言つたら貴女それいえるう？」

思わぬ男の名前に、静香は絶句した。それから深く溜息をついた。

「…っ。…………。あの男はまったく。」

菅沼と言う男はこの【リヴァイアサン】の上客の一人で最大の悩みの種でもある。払いはいいが、女の子にいろいろちよっかいを出しまくる。普通ならそのまま、力に任せて店から追い出せばいいのだが、どうやらどこかの暴力団の組員らしく報復が怖いため、ある程度のことを目と瞑っているのである。

「でも、それならあの客追い出してよかったですかね？」

暴力団というのはともかく面子を大事にするから、身内に被害が及ぶともかくただじゃ済まされない。菅沼の報復を恐れるのであれば、静香が啖呵を切った時点でむしろ押さえられているのは静香のほうがはなかったか。

だが、片桐は心配ないとばかりに首を横にふった。

「それはいいと思うわ。自分が追い出されなかったら特に気にする人じゃないから。友達甲斐の無い人よね。」

「胸糞悪くなります。」

「こら〜。ナンバーワンが糞とか言わない。同感だけどね。」

茶化したようにいう支配人とくすりと笑いあう。

「じゃあ、ボトル分、もう少し稼いできます。」

静香が踵を返しかけたとき、片桐がさらに声を掛けた。

「うん。がんばって。あ。そう言えばさっきの男、黒服たちに聞いたらまだ店の近くをうろろしているみたいだから、変えるときは一人で帰らないほうがいいわよ。」

あっけらかんとした口調だが、物騒な内容に静かは顔を顰めた。

「ええ？…しつこいですね。流石、菅沼推薦…。でも大丈夫でしょ。いつもの格好で変えれば誰も私だって気づきませんって。」

いつもの姿を自分で想像して、静香は自身を持って頷くと少し苦笑気味に片桐が笑う。

「…まあ、そうでしょうけどね。でも昨日貴女、酔っ払ってそのままの格好で帰ったでしょ？それは流石に危ないわよ？大丈夫だった？」

「……それは…。」

昨日のことを思い出し、少し言い淀んだ静香に敏感に片桐が反応する。

「…なんかあったの？」

「あったと言えばあった…。」

片桐と目を合わさないように静香は視線をそらした。その様子に、普段笑ったような顔の片桐が怒った。

「なにそれ！何ですぐ言わないの！すぐに警察！」

携帯電話をすぐさま取り出した片桐を慌てて静香は止める。

「ちよつと！キャバクラの支配人がすぐに警察とか言わないでくださいよ。大丈夫でしたよ。だから今日何事もなくここにこれているんでしょ？」

慌てて取り繕うと、確かにそうだが、と言った感じで片桐がしぶしぶ携帯電話をポケットにしまう。

「…ま、そうかしら。でも本当になにもなかったのよね？」

心底心配といった顔の支配人に少しおかしくなる。本当にこの支配人はどうしてこんな水商売の店を任されているのか不思議なくらいお人よしだ。ナンバーワンとはいえ、たかだかキャバ嬢の自分なんかを心配するのだから。だが、悪い気はしないので笑った。

「相変わらず心配性ですね。本当ですよ。ちよつといつもと違う道を通って帰っただけです。ちゃんと家にも帰りつけてましたって。」

「ほんとに？まあ、静香の言うことだから信用するけど。気をつけよ。」

疑わしそうな顔をしてはいたが、こちらを尊重して引き下がった片桐の行為にほつとする。着かず離れずな距離。決して他人行儀ではないが、家族といえるほど馴れ馴れしくもない。

そんな関係が静香にはとても居心地が良かった。

「はい。それじゃ、そろそろホールにもどります。」

「ああ、いつてらっしゃい。」

今度こそ支配人が手を上げ見送るなか静香は再び舞台へと戻ってい

つ
た。

第二話 最悪の出会い

静香は逃げていた。

ああ一体どうしてこんなことになったのだろうか。

客と盛り上がった拳句、珍しく深酒をしてしまった帰りだった。

普段はそれとわからないように着替えて帰るのだが、その日は酒のせいか面倒でホールにいる姿に薄手のコートを羽織っただけの姿で帰り道を歩いていた。

午前一時。店が閉まり、掃除をして帰る道すがら。

一体どの位前からつけられていたのかわからない。とにかく気がついたときには、姿の見えない気配が、ずっと自分をつけているのを感じていた。

静香はナンバーワンのキャバ嬢だから、もちろん永久指名のお客は何人もいるし、しつこく言い寄る男達も多い。

ストーカーするような輩もいないとも限らないので、普段はそれとわからない格好で念のためいつも別の道を歩くようにしていた。

だから、きつとこうして追いかけてくる相手は自分の家は知らないはずだった。

そうでなければ静香の姿をしているときにわざわざつけてくるはずはなかった。家を知っているのなら待ち伏せすればいいのだから。

ともかくこの場を撒いて家に辿り着きさえすれば、きつと安全なはずだった。

男を撒くために静香は走りにくいヒールのまま、ネオン輝く舞台町を走りまくった。

右へ左へ。ともかく男を振り切りさえ、すればいい。

幸い静香は方向音痴ではないので、方向さえ見失わなければ家に帰れる自信はある。

複雑な細い路地の多い舞台町を奥へ奥へと突き進む。普段は立ち入らない物騒な地域だけは避けて急ぐうちに、はたと気付くと見たこ

とのない場所に迷い込んでいた。

（ここは…。）

人通りはなくひっそりとした場所だった。すぐ隣には廃屋と思しき古い建物があり不気味さに花を添えている。あたりを見回すが古くて高いビルに覆われた場所で見通しは利かず、ネオンのある町側とは反対側にあるため、辺りは舞台町の中だというのに薄暗かった。そこまで視認したときだった。視界が突然ぐらりと揺れたかと思うと、立っていられず、膝を突く。

（き…。）

気持ち悪い。

競りあがってきたものを喉の奥で無理やり止めて、荒い息をつく。視界がぐらぐらゆれた。

ただでさえ、あまり強くないお酒を普段より多めにもらった夜である。それに加えてストーカーを振り切るために、全力疾走だ。

気分が悪くならないほうがおかしかった。

何とか吐きかけたのは我慢したが、どうもこれ以上逃げることは体調的に出来そうもなかった。だが、ストーカーを撒けたかどうかも確認できていない状況で、道端で休んでいるわけにもいかなかった。（ともかくどこかに隠れて…。）

そう思つて、あたりを見回すと、一軒の古びた廃屋が目に入った。そこは今にも崩れかかりそうな今の舞台町には珍しい木造の建物だった。こんな建物が舞台町に残っているのかと、元氣なときには驚きもしただろうが、今はそんなことはどうでもいい。

静香は揺れる視界とひどい頭痛にくらくらしながらも、なんとかその建物の玄関口まで這うようにしてたどり着く。

ともかく、どこか休めて、隠れられる場所が欲しかった。

こんな古びた建物に人が住んでいるとは到底信じられなかったが、玄関の様子が廃屋にしては綺麗過ぎる。この舞台町で使っていない建物の前を掃除するような善良な人間がいるとは思えなかった。きつとこの古びた廃屋めいた建物には人が住んでいるはずだった。

時間は既に深夜を回っている。建物内はひっそりとしていて、電気はついていない。本来全うな人間なら当に寝ている時間だ。あまりまえた。

静香はぐらぐら揺れる視界で、呼び鈴を探したが、見当たらない。仕方なく、玄関先の扉を拳で叩く。

「……す、すみません。どなたか……。」

ガラスの張られた引き戸を叩くと以外に大きな音がする。それをスピーカーが聞きつけやしないかと、ひやりとする。自然に焦るので扉を叩く音が大きくなった。

「すみません！お願いします！匿ってくれませんか？どなたか……。」そのとき、突然玄関先の明かりがつく。

その中に人影が見えて、どっと安心する。どうやら中の人気が付いてくれたようだ。まあ、あれだけ留守でなければ出てくるだろうが。

ともかくこんな時間に押しかけるのだから、せいぜい頭を低くして、思っていたとき、不意に引き戸が開く。突然のことに動揺して思わず、開いた人間をまじまじと見てしまった。

そこにはおそらく静香よりいくらか年上の男性が立っていた。ひどく廃屋めいた建物に不釣り合いな人間だと言うのが第一印象だった。まず長身だ。明らかに背の低い日本人用に作られた間口から頭を低くしてこちらを覗きこんでいる。

栗色の髪に切れ長の瞳。鼻はすつと通り唇は薄く引き結ばれている。美男が多いと言われるリヴィアサンの客や従業員を合わせてもなかなかお目にかかれないほどの美男子がそこにいた。そしてさらに不釣り合いなことに男の足元には幾人かの。

（こども？）

小学校低学年くらいの子供がいた。

舞台町は夜の街。あまり子供の情操教育に似つかわしくない町だけにこの町で子供を見かけることはほとんどなかった。それなのにどうしてこんな夜遅くに舞台町で子供をみることになるのか。

そんな廃屋に不釣合いの男は静香の姿を確認するなり、ひどく驚いたような顔をした。

「あんたは…っ！」

その言葉に静香ははっとして慌てて頭を下げた。

「す、すみません！夜分遅くに！私、追われてまして。決して怪しいものではないです。」

そこまで口にしたとき。

ばしゃん！

一瞬。静香は何が起こったかわからなかった。気付いたときには前髪から水滴が垂れていて、そつと頭を上げるといつの間にかバケツを抱えたその男が憎悪の視線をこちらに向けていた。

あまりに殺気立った視線に思わず背筋が寒くなる。この男性とは間違いない初対面である。一体なぜこんな視線を浴びなければならぬのかわからない。

あまりのことに呆然としてみると、男性が親の敵に対するよう憎憎しげに吐き捨てた。

「ここはお前みたいな人間が来るところじゃない！とつとと帰れ！」

そのまま男は引き戸を閉めようとする瞬間、静香は。

「…うりゃあ！」

「っ！」

間一髪完全に締め切られる前に片足を扉の間に突っ込んで阻止する。驚いている男の隙について、再び、引き戸を全開にしたかと思うと、静香の行動に驚いている男の胸倉を掴んで、視線を合わせ睨みつけた。

「…初対面の女性に対して、突然水をぶっ掛けるとはどういう見だ？こら？」

完全に据わった目をして睨む静香に、男も思わずびり気味に身を引こうとするが、静香はそれを許さなかった。

「この町では舐められたほうが負け。そんな町に生きている女を舐めたら…舐めたら…」

勢いが続いたのはそこまでだった。

一気に視界が回った。静香は思わず、胸倉を掴んでいた男にもたれかかる。それから今度は喉から競りあがってくるものを押さえることが出来ずに。

「おげー！」

「っ● × \$ % # ! ! ! !」

男の悲鳴にならない声が聞こえた。だが、気持ち悪さは収まらない。さらに水をかぶったせいか悪寒がする。

静香は、力が抜けていくのを感じて、そのまま意識を手放した。

第二話 最悪の出会い（後書き）

出会い頭に吐く女と水をぶっ掛ける男と。
どっちが最悪なんでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498f/>

夜街幻想

2010年12月9日14時28分発行